

たちの回顧や神社制度調査会の議論の経緯、あるいは無格社そのものの概念の問題なども検討することで、その施策の内実を窺いたい。そのことによつて、筆者がこれまで明らかにしようとしてきた近代以降の「神社概念」の問題のなかで、特に神社院時代に考えられていた「神社概念」と併せて、近代の神社行政のなかで合言葉のように用いられてきた明治四年五月十四日の太政官布告第二三四「神社八国家ノ宗祀」という文言の意味との関わり、神社の公共性と宗教性との関わりの問題について幾許かでも明確化しようとするところにある。

無格社整理を考えることは、単に近代、昭和初期の問題として捉えるのではなく、現代においてはいわゆる不活動宗教法、不活動神社といわれる課題への対策とその整理や合併という実際の取扱の問題を考える上でも非常に参考となる問題でもある。今後も引き続き、昭和初期の神社行政や神社・神職のあり様等を改めて一つずつ問い直してゆきたい。

#### 今泉定助の思想——神道的国体論の宗教性——

昆野 伸幸

本報告は、今泉定助(文久三—昭和一九—一八六三—一九四四)の思想に即して、大正期から昭和初期における国体論の一端(神道的国体論の特質)について明らかにするとともに、その「大正デモクラシー」期の国体論が昭和十年代以降にどのような機能を果たすことになるのかについて説明することを目指すものである。

これまでの今泉研究では、彼の伝記的研究や川面凡児(文久

二—昭和四—一八六二—一九二九)の思想との比較検討が主となってきたが、ややもすると川面との関係性ばかりで今泉の思想が捉えられる傾向があった。しかし、川面という参照軸から離れて、今泉の神道的国体論を時代の中に位置づけ、その意義を説明する作業が必要であろう。

そもそも今泉にとつて、神道とは、神に授けられた「自性」を発揮・実行することである。その際、「利害得失毀誉褒貶」から離れ、「自性」を回復するために求められたのが、祭祀であり、禊や祓といった行である。彼によれば、人は皆誰でも、禊、祓、鎮魂といった行を通じて人格修養に努めることで、あらゆる欲から離れた神の境地(「神の心」「神格」)に至ることができる(「神賦の「自性」の回復」)。このような行の強調は、先行研究で散々指摘されている通り川面凡児からの影響によるものである。

しかし、むしろここで注目すべきは、今泉が祭祀、行、神といった神秘的、ある意味ではアナクロな用語を使いつつも、神賦の「自性」の回復というかたちで個人人格の完成を目指す人格主義的な思想——モダンな思想——を展開している点である。全国神職会の機関誌においてすら「個人の完成」が求められる時代において、神道が社会に浸透し、祭祀を通じて個人人格の完成を遂げ、あらゆる人々が自己の生活や人生を豊かにしていく——このように彼は「現代化社会化」した新たな神道像を構想した。

さらに今泉は神道という人格完成・自己錬磨を通じて、国家改善、世界・人類の救済をも展望していた。このように彼の神

道・祭祀観は、個人レベルにとどまらず、彼の国家・国体観と密接に関わることになる。

というのも、万世一系の皇統という日本の国体は、「偶然」によって続いてきたものではなく、絶えざる祭祀——公平無私の境地へ至る自己修養——の実施によって支えられてきた、と今泉は理解していたからである。このように彼の神道的国体論は、不断の祭祀の執行を全国民に求めた。彼は、「大正デモクラシー」の時代潮流に反して、神勅の意義を強調したが、その実質は国民に主体的な実践(祭祀)を要求するものであった。

ここで問題となるのは、祭祀と宗教の関係である。今泉は、祭祀を西洋的な「宗教」に優越する「大なる宗教」と位置づける。このような祭祀観は、大日本帝国憲法第二八条の規定する信教の自由に拘束されずに、全国民への祭祀の強制を可能とする。

以上のような今泉の神道的国体論は、人格主義・世界主義と親和的な、「現代化」した神道を核とするものであり、国民の主体的な実践を要請するモダンなものであった。ただし、その神道的国体論は、昭和十年代以降、政党政治・ファシズムをもとに批判しつつ、神道国教化を構想することで、「宗教」とは区別された祭祀を国民に強制することになるとともに、神代の顕現、神話の再演としての「八紘一宇」論に帰結し、その実現に向けて、臣民にあらゆる犠牲を強いるものになる。「大正デモクラシー」期の多様な国体論の中に登場した今泉の神道的国体論は、昭和十年代には、科学・哲学・宗教をこえた地平から発せられる、国民に抑圧的な議論へと行き着いた。

#### パネルの主旨とまとめ

藤田 大誠

本パネルは、平成二十四年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)基盤研究(C)「帝都東京における神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」(研究代表者：藤田大誠)、並びに平成二十四年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「近現代日本の宗教とナショナルリズム—国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み—」(研究代表者：小島伸之)による二つの共同研究グループが協力し、双方に重なり合う大きな課題の一つである「国家神道」をテーマとして企画したものである。

近年、「国家神道」研究は、「国家神道」という概念・枠組の再考や言説分析の観点からの理論的・評論的考察が目立つ一方、当然かかる考察の基盤や前提となるべき近代の神社制度や神社境内、神職・神道人そのものの実態やその変遷過程について具体的な史料をもとに検討する歴史的研究も徐々に蓄積されつつあり、神道史や宗教史のみならず、社会史や思想史、教育史、建築史、都市史など、多岐に互るアプローチから活発に取り組まれている。とりわけ最近では、畔上直樹や島蘭進、昆野伸幸らによって、従前の「国家神道」研究(特に近代神道史におけるもの)について、いわば「制度史偏重」との批判を込めつつ、地域社会史や日本宗教史、日本思想史などの観点から新機軸を打ち出そうとする試みがなされている。また、夙に林淳は、日本近代宗教史の諸問題(国家神道、近代仏教、新宗教、宗教概念など)に関する研究史について、これまで明治期の比